歴史地理学　172　36～38　1995. 1

〔コメント〕

小野寺淳報告「絵図に描かれた自然環境」によせて

吉　田　敏　弘

I. はじめに

近年における近世官撰国絵図研究の進展はめざましい。川村博忠氏の先駆的な制度史的研究の成果[1]をうけて，最近では，現存諸本に関する個別絵図研究のレヴェルで新たな開拓が試みられている[2]。こうした個別絵図研究を通じて，国絵図の資料的性格，そのさまざまな活用の可能性と限界が，いっそう具体的なレヴェルで検討されるようになったのである。

「環境の歴史地理」というテーマもさることながら，一見「歴史地理学資料論」の趣もある今回のシンポジウムにおいて，近世河川絵図研究を開拓された小野寺氏が，官撰出羽国絵図を素材に，そこに表現された自然環境，とりわけ植生表現の問題を報告された。それは，従来挿図の域を出なかった国絵図が，ようやく歴史地理学の evidence としての位置を確立するにいたったことを象徴する出来事であった。

はからずも小野寺氏の報告のコメンテーターを仰せつかり，大いに期待して報告を拝聴した。報告の要約は省略したいが，現存する近世官撰出羽国絵図の網羅的な収集と関連文書の分析によって，それぞれの現存絵図の史料批判を行い，正保出羽国絵図，元禄出羽国絵図の作成過程を明らかにした後，個々の絵図に表現された山林植生等の自然景観について検討し，一連の国絵図系諸本中のいずれに現地の地理的状況がリアルに表現されているのかを吟味されたものであった。短時間の報告の背後に膨大な史料調査と史料分析を窺わせる重厚な事例研究であり[3]，報告者に敬意を表したいと思う。

しかしながら，絵図に表現された自然環境，という側面に関しては，いささか筆者の理解の及ばぬ点や疑問が残されたように思う。重厚な成果の前ではとるに足りない些細な問題かもしれず，また筆者の誤解や曲解に由来する点もあろうが，以下ではあえて忌憚なく所感を述べさせていただき，一層のご教示をお願いしたいと考える次第である。

II. 作成過程と植生表現

今回の報告で最も注目すべき成果は，一国の国絵図作成の過程で植生表現がどのように変化したかをデモンストレートされた点にあったと思われる。すでに周知のように，四次にわたる官撰国絵図の中では最も山林情報にとむ正保国絵図でも，野帳段階ではいまだ山林情報は表現されず，内見図段階でにわかに山林情報が増加し，ついで清書された献上図段階では再び山林情報が簡略化される，という変化が示された。同じ変化の痕は元禄国絵図にもみられ，正保国絵図を踏襲した内見図段階では多様であった植生表現が，献上図段階ではシンプルなものに代わったこと，また，正保国絵図に明記されていた特徴的な植生表現が元禄国絵図では削除され，全般に無味乾燥な植生表現になったことなどが，実際の絵図表現から確認された。

ところで，こうした植生表現の変化はいったい何をあらわしているのだろうか。小野寺氏は完成図のみが詳しいのではなく，むしろ下絵図・内見図に詳しい情報もあるという認識の下に，正保内見図など，下絵図にむしろ現実に即した植生表現がみられる傾向を指摘された。

しかし，正保国絵図において野帳段階の下絵図に

植生調査の痕跡がみられないことはどう解釈すればよいのだろうか。内見図段階では，突如植生に関する描き分けがみられるから，正保国絵図における山林情報はこの間に幕府からの指示によって追加された，むしろ副次的な情報であった。もちろんこの間に現地調査が行われた可能性も否定できないが，内見図における植生表現もまた，現地での写生に基づくリアルなものであったかどうかは疑わしい。この点は是非小野寺氏にご意見を窺いたいと思う。

次に元禄図であるが，筆者が先に分析した伊勢国絵図の事例[4]から考えると，元禄図では新規の絵図作成事業は不要とされ，正保図からの変地(異同箇所)の改訂のみが実施されている。従って，正保図と元禄下絵図の間で植生表現に際だった違いがみられるならば，それが何に由来するのか，ご教示願いたいと思う。これらの吟味なしに国絵図の植生表現を直ちに現地植生と結びつけるわけにはゆかないと考えるが，これについては項を改めて述べることにしよう。

III．図像表現における絵師の役割

上述のように，正保，元禄ともに，最終的な献上図では山林情報や植生図像が簡略化されている。小野寺氏は正保図の場合，これを一国図としての表現の統一から説明され，元禄図の場合は全国一律に「里」の領域における植生表現が削除されたため，と説明されたように思う。

内見図と献上図との違いはたしかに幕府の方針に由来するところが大きいが，ここではさらに，献上図の清書にあたって江戸の狩野派御用絵師がこれを担当したことに注目する必要がある。内見図における植生表現がいかなるものであろうと，それが主題的情報として重要視されない限り，清書を担当した絵師が比較的自由に表現を改めた可能性も想定されるからである。

荘園絵図などにおいても同様の傾向を指摘することができるが，山地の山容とそれを彩る植生は絵図における最も「絵画」的な要素であり，担当の絵師が自ら技量を存分に発揮しうる部分であった。元禄国絵図が様式的に最も統一のとれた絵図群となっているのも，同じ絵師の工房で一括清書されたこと，それゆえ山地や植生の表現法が統一されていること，と決して無関係ではない。

小野寺氏によると，正保図(献上図以前の一国図)の元禄期における写本では，図像の位置は同様でも，植生表現がやや多彩であるという。私見によればそれこそが絵師の違いに由来する問題であり，当時は写本といえども，完全な複製ではなく，写本作成を担当した絵師の自由な裁量の幅が多少なりとも容認されていた可能性が大きいように思われる。

このように考えるとき，小野寺氏が強調された正保図と元禄図との視点の違い，描かれた植生図像の標高の違い，の問題は，あるいは絵師の植生図像の表現法の違いに由来するのみではないか，という疑問を禁じえない。史料や旧版地形図の植生情報とも比較された興味深い論点ではあったが，筆者には，国絵図の植生表現がそれほど写実性に富むものとはとうてい思えないのである。正保図における野帳段階の下絵図に植生に関する調査の痕跡が認められないこと，さらに元禄図では一般に正保図の図形の改訂が行われたのみで，現地調査に基づく新たな絵図作成は行われなかったこと，などを考慮すれば，正保図と元禄図との間の植生表現の違いは，現地の景観の問題と言うよりも，絵師の絵図表現レヴェルで解釈すべき問題ではなかろうか。

IV．表現された植生，認識された環境

以上に指摘した諸点は，いずれも同じ根源から発している。小野寺氏自身，絵図の表現が作成の目的や方針によって取捨選択され，必ずしも現地景観のリアルな描出とはなっていない点を十分考慮され，そうした史料批判を重視する立場に立っていることはよく理解できる。にもかかわらず，ボキャブラリーの豊富な情報に関しては，それを直ちにリアルな現

地情報の反映とみなし，描き方の違いを描かれる対象の違いから解釈されたのであった。図像の描き分けの多寡や視座・視線の違いは，絵画表現レヴェルでも説明可能な問題である。国絵図から自然環境を読むという課題を前に，いささか早急な解釈に向かわれたのではないか，との憾みを禁じえない。

絵図における植生表現の問題といえば，葛川絵図のそれが想起されるが，そこでは，現実の植生とは別に，絵図作成主体が樹木図像＝植生のイメージに託したメッセージの読解が試みられたのであった。もう一つ荘園絵図の事例をあげておこう。1993年5月，国立歴史民俗博物館で開催された「荘園絵図フォーラム」[5]において，法隆寺蔵播磨国鵤庄絵図の植生表現が問題とされた。この絵図は嘉暦の年記をもつものと，その写本で至徳の年記をもつものの二本が知られるが，このうち前者の植生表現は後者のそれより荒廃しており，従って，前者と後者の前後関係には疑点があるという問題提起がなされた。前後関係に関する疑惑の根拠はこれのみではなかったが，問題を植生に限定すれば，これまた絵師の問題を考慮しなかったための勇み足であるように思われる。二本の絵師がそれぞれ現地に赴いてつぶさに林相を写生したとは考えられず，表現された植生は絵師の頭の中にある山のイメージを映し出しているにすぎないとみられるからである。

絵図に表現された自然環境は，第一にそれを描いた絵師のイメージを通じて，第二にそれを描かせた主体のイメージを通じて画面に定着したものといえよう。従って，絵図を描かせた主体がとくに指示するならば，現実の植生をある程度反映した植生表現もありうるし，逆に指示がなければ，絵師は自らの技量のおもむくままに植生表現を行うこともあったであろう。また，国元の絵師と江戸の絵師とで林相のイメージに違いが生じるのも当然である。いずれにせよ，表現された植生は，認識された山林像，イメージの中にある山林像なのであって，こうした環境認識，景観のイメージを通じてのみ，我々は現実の自然景観と絵図に表現された自然景観を結びつけることができるのである。

小野寺氏の指摘通り，正保図の内見図には最も詳細な山林情報が表現されている。それが現地の植生を反映するものであろうこともまた納得できる。しかしそれは，現在の我々が科学的にとらえる「植生」とは自ずから異なるものであったはずであり，作成目的や方針に規定された山林情報と考えられる。小野寺氏には，それがいかなるものであり，どのような観点から描き分けられた環境なのかをさらにご教示願いたいと思う。

V．おわりに

今回のシンポジウムでは，絵図をはじめ，地名や文学作品などの資料が取り上げられた。いずれも人間個人や社会の認識やイメージを通じて過去の環境に接近すべき資料群であり，環境認識の問題が活発に議論されることを期待していたが，これは半ば期待はずれに終わった。自戒をこめて，今後こうした問題意識の一層の鮮明化を期する次第である。非礼を省みずに蕪辞を連ねた。小野寺氏をはじめ，オーガナイザーの日下氏ほか報告者，出席者各位のご容赦をお願いしたい。

（國學院大学文学部）

〔注〕

1）『江戸幕府撰国絵図の研究』古今書院，『国絵図』吉川弘文館

2）上原秀明氏による一連の肥後国絵図の研究など。

3）大会後，小野寺氏による「国絵図と河川絵図」（『ザ・絵図』山形県立博物館）に接した。

4）『四日市市史　絵図編』，「元禄国絵図の作成過程(一)，(二)」（『四日市市史研究』第5号，6号）

5）フォーラムの記録は近刊（新人物往来社）